

音のない世界

大阪狭山市手話言語条例

目で聴く言葉の響き

【ろう者】手話を母語とする聴覚障がい者

病院の受付で耳が聞こえないことを筆談で伝えた片桐さん。待合で自分が呼ばれるのを待っていました。しかし、1時間、2時間、3時間待っても呼ばれません。受付に行くと、片桐さんが聴覚障がい者であることを忘れられていて後回しになっていました。受付の人が名前を呼ぶ声は、片桐さんには届きませんでした。

問い合わせ 福祉グループ ☎349-9407

音 のない世界を想像してみ
てください。

電話やインターホンの呼び出し、テレビの内容、後ろから呼ばれる声……。どのような生活が見えてくるでしょうか。

約36万人。日本の人口のおよそ1千人に3人が身体障がい者手帳を持つ聴覚障がい者です（厚生労働省（2008）「平成18年度身体障がい児・者実態調査結果」）。手帳を持たない人も含めると、実際にはもっと多くの聴覚障がいを持つ人がいると考えられます。

職場で、学校で、家庭で、お店で、道端で、周りに音のない世界に生きる人がいたら……。あなたはどのようなサポートができますか。

接し方がわからない

「手話の勉強を始める前のことです。私の子どもと同じ年の子どもを持つろう者のお母さんと公園でばったり会いました。そこで手話で話しかけられたのですが、どうしていいかわからず、とまどって帰ってしまっただけです。それからずっとその日のことが忘れられなくて」
そう話すのは手話通訳士の子安さん。



手話通訳士
子安由美さん

▲手話で話しかけられたときの思い出を語る市登録手話通訳者の子安さん

身体障がい者福祉協議会聴覚部会長で、ろう者の片桐さんも健聴者と聴覚障がい者がコミュニケーションを取る難しさを次のように話します。

「たとえば道を尋ねられたとします。まず耳が聞こえないことを伝えなければいけません。それを手話で伝えようとしてもわからない人が大半で、なかにはペンとメモを取り出して筆談をしようとしてくれる人もいますが、だいたいの場合はその時点で諦めて行かれてしまいます」

手話の必要性—— 大きな情報格差

では、手話のできない人がろう者とコミュニケーションを取るにはどうすればよいのでしょうか。片桐さんに聞きました。

伝えようとする、 その心が大事

ろう者のお母さんとの思い出がずっと心残りだったという子安さんは、あるイベントがきっかけとなり、手話を学びたいという気持ちが目覚めます。

「狭山町時代に開催されていた文化祭で『泣いた赤鬼』という手話による劇を見て、手話ってなんてすごいんだらうと思ったのと、心残りだったあのときの感情が結びついて、絶対に手話をやろうと思いました」

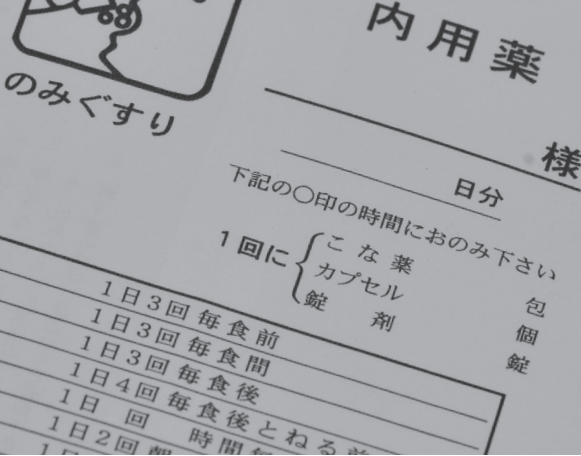
その後、子安さんは市の講座やサークル、書籍などで手話を学び、勤めていた普通学校からろう学校に移って教壇に立ちました。

「ろう学校に入学した段階では、手話のできる生徒から全く



「筆談、指さし、身振り手振りなどがあります。一番は筆談かなあ。でも文章が苦手なろう者もたくさんいるので注意が必要です」
手話と日本語は文法の異なるものです。聴覚障がいがあっても日本語は理解でき、書けば伝わると思ひ込んでいる人もいるかもしれません。しかし、手話を母語とするろう者にとって日本語も外国語の一つなのです。

できない生徒まで様々ですが、手話のできない生徒ができる生徒に教えてもらったり、見て学ぶことによってどんどん手話を覚えていき、どんどん会話がいきいきとしていくんです。ある日、見に行った劇のカーテンコールでは、劇団員さんがありがとと手話で伝えてくれたんです。それまでつまらなさそうにしていた生徒の顔が晴れました。ろう学校には、そういった伝わる喜びがありました。手話を使っただけで伝えた、わかり合いたいと思う人が増えればいいなと思います。手話で細かいコミュニケーションができなくても、筆談や表情、身振り、指さしなどで伝えようとする、その心が大事なのではないでしょうか」



「すみません 私は体調が悪いので来てくださーい いいますか」
「頭こわれます どうしますか」
これは、市役所に常駐している手話通訳士が実際に受けたメッセージです。
「すみません、私は体調が悪いのですが、来てもらえませんか」
「頭が痛いのですが、どうしたらいいでしょうか」
という文面を送りたかったとのことでした。

また、一定の文章力があっても、言葉のニュアンスを受け取る難しさがあるということを、片桐さんは医療を例にして話します。

「薬を処方されるときに、『食間』に飲んでください、と言われることがありますが、食事中

に飲むものだと誤解する人がいるんです。私もわからないことがあつて、再度説明をお願いすることがよくあります」

このように文字で情報を伝え、また文字から情報を得るには様々な障壁があります。健聴者にも同じことが言えますが、わからなければ聞くということの方が容易ではない聴覚障がい者にとっては、より大きな障壁となります。

「今は医療をはじめ様々な日常の場面で、行政の手話通訳者・要約筆記者の派遣依頼ができるようになり、以前より環境が改善されましたが、やはり手話通訳がないと困る場面がたくさんあるということです。聴覚障がい者にとって一番困るのは情報です。それを皆さんに知ってほしいです」

と、片桐さんは手話の必要性和健聴者との情報格差について言及します。

じぶんいふ、 じけないういふ

障がいと一口に言っても、程度の違いで日常生活は大きく変わります。また、多くの障壁がある一方で、障がいを持たない人がこれは障がい者には難しい



身体障がい者福祉協議会聴覚部会長
片桐多鶴子さん

▲ろう者の片桐さんは、聴覚障がい者の様々なハードルと手話の必要性を説明します

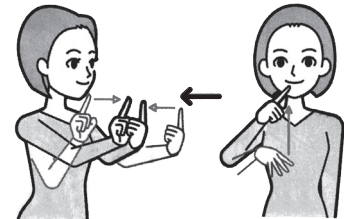
手話で話してみよう！



こんにちは
立てた右手2指を重ねて前方から額の中央へ当てる



おはよう
こめかみに当てた右手拳を下ろすと同時に頭を起こす



はじめまして
①甲を上に向けた右手を引き上げながら人差し指を残して4指を握り、
②立てた両手人差し指を前後に向かい合わせ同時に近づける



ありがとう
左手甲に小指側を直角に乗せた右手を上げながら頭を下げる



おつかれさま
①右手拳の小指側で左腕を2回たたき、②顔前で右手を斜めに構えて少し前へ出し、同時に頭を下げる



おやすみ
頭をかしげ、こめかみに右手拳を当てる



こんばんは
手のひらを前へ向けた両手を弧を描いて引き寄せ、目の前で交差させる



さようなら
5指を広げた右手の手のひらを前に向け顔の脇で振る



悲しい
つまんだ右手2指を目元から頬に沿って下ろす



うれしい、楽しい
湾曲した両手の指先を胸に向け、交互に上下に動かす



待つ
右手4指の背にあごの下を当てる

※「全日本ろうあ連盟発行・『私たちの手話 学習辞典Ⅰ』より転載

手話学習動画をつくりました！



×

YouTube

=



大阪狭山市チャンネル

手話に関する講座

手話奉仕員養成講座

毎週平日の1日の夜2時間(全43回程度)で、市内に居住・通勤・通学する人を対象に、初心者向けの講座を開催しています。
※今年度の受け付けは終了しています。来年度以降の応募をお待ちしています

手話奉仕員レベルアップ講座

毎週平日の1日の夜2時間(全10回程度)で、市内に居住・通勤・通学する手話奉仕員養成講座修了者(手話通訳士、大阪府手話通訳登録者、大阪府手話通訳者養成講座修了者は除く)を対象に、レベルアップ講座を開催しています。詳しくは問い合わせください。

手話サークルの紹介

手話サークルさやま

とき・ところ 木曜日午前10時～午後0時/さつき荘・会議室、金曜日午後7時～9時/市立公民館・講習室 ※第5週目は休み
問い合わせ 手話サークルさやま ☎0721-21-7313

大阪狭山市手話言語条例のポイント

●基本理念

- ・手話は言語です ・手話への理解の促進、普及を図ります
- ・障がいの有無に関係なく、すべての市民がお互いに人格や個性を尊重し合いましょう

○市民の役割

- ・手話や聴覚障がいについての理解を深め、普及に協力しましょう

○事業者の役割

- ・手話や聴覚障がいについての理解を深め、普及に協力しましょう
- ・ろう者が利用しやすいサービスを提供したり、ろう者が働きやすい環境を整備したりするよう努めましょう

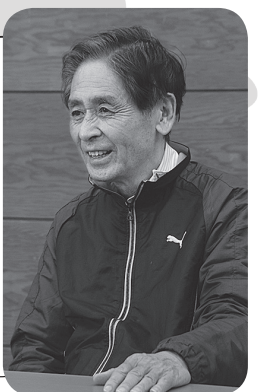
○市の役割

- ・手話への理解の促進、普及を図り、手話を使いやすい環境を整備します
- ・市主催のイベントや講演会などの手話通訳の実施や、講習会など手話を学ぶ機会を提供します



3月26日、条例制定の瞬間に立ち会おうと、ろう者と手話サークルの皆さんが集まりました

私は視覚障がいを
持っています。
この条例制定を機に、
同じ障がい者として、
聴覚障がい者の暮らし
が少しでも楽になるこ
とを願っています。



身体障がい者福祉協議会会長
長尾鷹康さん

手話の歴史

日本から手話がなくなろうとしていたことを知っていますか。
明治11年(1878年)、京都盲啞院が設立され、ろう教育が本格的に始まりました。当時のろう教育は、手話、指文字、筆談で行われていました。
大正時代に入り、相手の口の動きを読み取り、発声してコミュニケーションを取る「口話」が主流になりました。西川吉之助は、難聴者の娘はま子をはじめ、すべての聴覚障がい者が偏見や差別を受けることなく、健聴者と同等に生きられるようにと、世界各国から文献を集め、はま子に教育をしながらかしを重ねました。やがて、はま子の流ちょうな会話を目の当たりにしたろう教育者のほほすべてが口話を支持するようになり、多くのろう学校で手話を禁止するようになり、その流れに異を唱えたのが、高橋潔です。大阪市立聾啞学校の校長だった高橋

は、口話の習得よりも道徳教育に時間が割かれることを重視しました。また、口話を習得できる聴覚障がい者の割合が低いことを示して、そのろう者によって適正な教育が行われるべきであると訴えたのでした。
しかし、口話を支持する流れは変わらず、ついには手話を教える学校は大阪市立聾啞学校のみとなり、高橋の思いはろう教育界に届くことはありませんでした。
時は過ぎ、今私たちはテレビやイベントで手話を目にしています。学校で禁じられた手話でしたが、ろう者が団結して手話を権利として主張し始め、その声が全国に広まり、「手話は言語である」と認められるまでになりました。
手話と口話。その間には、ろう者の社会参加が認められるよう、多くの人の思いがぶつかり合った歴史がありました。

参考文献
山本あさむ「1991-1993『わが指のオーケストラ』(1-4巻)秋田書店」
深澤茂俊「2016『聴覚障害者のコミュニケーション方法―手話・口話論争と障害の克服―』神戸親和女子大学福祉臨床学教科書13号15-29頁